

特集：「学力問題」を考える 学力問題の核心を問う

嶋野道弘

(文教大学教育学部)

Special Issue on the Problem of Academic Achievement in Japan;
A Consideration on the Main Point of the Scholastic Ability Issue

SHIMANO MICHIIRO

(Faculty of Education, Bunkyo University)

要旨

現今の「学力問題」を考えるに当たっては、求められる学力、子どもの学力の現状、学力育成の方法について再認識するとともに、これらの関係をつなぐ論理や実践に矛盾のないようにすることが肝要である。

1 大変な時代

[学力問題]の視点から現在の教育界の動向を見れば、端的に言って[大変な時代]になっている。その意味は、学力問題に関して、「本当に大変なことは何か」という学力問題の核心に気付かず、「本当に大変だ」という危機意識が高まっていないことである。そのため、学力観も、子どもの学力の現状の捉え方も、また、学力育成への取組みも、肝心なところで議論がかみ合わず、新たな改善への出口のない議論や実践に終始してしまいがちな傾向が見られることである。

教育の不毛な論争は、例えば「ゆとりか、学力育成か」というように二項対立にして、それを二者択一にすることから起こる。学力問題も例外ではない。「読む・書く・計算か、思考力・判断力・表現力や学ぶ意欲か」等、学力を捉える立場の違いにより議論がかみ合わない場合がある。そして、出口の無い議論に翻弄され、求められる改善が図れないとい

う不幸な事態を招く。

2 求められる学力・もてはやされる学力

子どもたちに求められる学力の視点から、本当に大変なこと、について考える。

(1) 求められる学力

子どもたちに求められる学力は、[生きる力](注1)であり、[確かな学力](注2)である。現状、これについては、理論上、異論はない、と見ることができる。

[生きる力]とは、平成8年に中央教育審議が、これからの教育に求められるものとして提唱した、自分で課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力、などの資質や能力である。

また、[確かな学力]とは、[生きる力]の

知的な側面を称したもので、「知識や技能に加えて、学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等までを含めたもの」である。具体的には、[知識・技能、思考力、判断力、表現力、学ぶ意欲、学び方、課題発見能力、問題解決能力]などの総合的な学力を意味する。今日、[確かな学力]の用語は、子どもたちに求められる学力を端的に表現するものとして広く使われている。

平成14年から順次実施された新学習指導要領は、[生きる力]や[確かな学力]の育成を基本的なねらいとしている。平成15年10月、中央教育審議会は、新学習指導要領のねらいの一層の実現を図るため、子どもたちに求められる学力について再度検討し、改めて[確かな学力]の育成を重視すべきことを提言した(注3)。

(2) 求められる学力の検討

子どもたちに求められる学力について、保護者、経済界、大学、の3者の立場から検討し、それを通して[確かな学力]の妥当性を検証する。

「保護者が学校で身に付けてほしいと思っていることは何か」(学校教育に関する意識調査 平成15年 文部科学省)

友達をつくったり、自分のまわりの人々などと仲良くつきあったりするなど社会の一員として必要な幅広い能力(84.2%)
読み、書き、計算など日常生活に必要な知識や技能(76.9%)

自分の思ったことや考えたことを他人にわかりやすく表現する力(70.7%)

自らを律し、他人を思いやることができるような豊かな人間性(69.8%)

困難な課題に柔軟に対応できる思考力や判断力(60.8%)

「ビジネスの基礎・基本能力として、今後必要となると思われるものは何か(人事担当者)」(企業の教育・人材に関するア

ンケート調査 平成15年 経済同友会)

問題を発見する力(75.9%)

行動力・実行力(75.0%)

常に新しい知識・経験・学力を身に付けようとする力(72.3%)

論理的に考えられる力(67.4%)

状況の変化に柔軟に対応する力(64.7%)

「学力低下が深刻だと思われるのはどのような側面か(国立大学学部長)」(大学生の学力低下に関する調査結果 平成10年 大学入試センター)

自主的、主体的に課題に取り組む意欲が低い(文系81.6% 理系86.7%)

論理的に思考し、それを表現する力が弱い。(文系72.8% 理系80.4%)

必要な科目は履修しているが、理解が不十分(文系37.7% 理系56.0%)

英語等外国語の基礎学力が低い(文系33.3% 理系56.3%)

大学での学習に必要な基礎科目を履修していない(文系33.3% 理系47.5%)

3つの調査結果とも上位5番目までを挙げた。保護者、経済界、大学の3者が求める学力は、知識・技能にとどまらない。ほぼ共通して、表現力、思考力、判断力、意欲などが高い割合を示している。それは、[確かな学力]に一致している。

(3) 求められる学力ともてはやされる学力
求められる学力は、これを重視して大切に uptake、広くもてはやされなければならない。しかし、今、[求められる学力]と[もてはやされる学力]の乖離が見られる。すなわち、建前は[確かな学力]を標榜し、実際の取組みは「読む・書く・計算を中心にした知識・技能」にとどまっている、というものである。それは極めて憂慮すべき問題である。

こうした乖離が起こる背景には次のようなことが考えられる。

第1に、評価の問題がある。知識・技能は、見えやすく、測定しやすい。そのため、学力

育成も、見えやすく、測定しやすい学力に偏りやすい。

第2に、指導の問題がある。例えば、読む、書く、計算などの技能は、反復学習が有効で指導がしやすい。一方、これに対して、思考力・判断力・表現力や学ぶ意欲などを身に付けさせる指導は、これまでに十分に行われてきたとは言えず、実践的な研究が必要である。

第3に、経験的な問題がある。一般に、経験のあることは、安心して自信を持って指導できる。しかし、そこに安住すれば、経験の多い知識・技能を中心とする学力の指導に偏りやすい。

第4に、基礎・基本の理解の問題がある。「基礎・基本を徹底し・・・」「基礎・基本の確実な定着を図り・・・」のように、学力育成の中核に基礎・基本の用語が多く用いられている。これを、「読む・書く・計算を中心とする内容」と捉え、その育成を中心におく傾向が見られる。しかし、現在、基礎・基本は、「基礎的・基本的な内容」を略した用語であり、読む・書く・計算などの知識、技能にとどまらず、思考力、表現力などの資質・能力を含めたものであり、学習指導要領の各教科等の目標、内容として定められたものの全体を一言で表現したもの、として用いられている。「基礎・基本」の理解の違いによっても、求められる学力ともてはやされる学力との乖離が生じている。

3 子どもたちの学力の現状

子どもたちの学力の現状から、学力問題の本当に大変なこと、について考える。

(1) 深刻な学び離れ

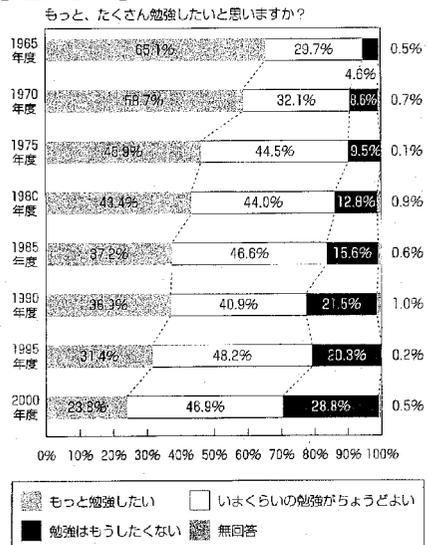
子どもの「学び離れ」が深刻な状況にある。それこそ大変なこと、それへの対応こそ、真剣に考えていかなければならない。

神奈川県藤沢市教育文化センターは、東京オリンピックの翌年の1965年から5年ごとに、中学3年生全員を対象にした「学習意識調査」

を実施してきた。2000年で8回目になる。

この調査によると、中学3年生で「勉強はもうしたくない」という子どもが3割に近い。35年前（1965年）の6倍に増えている。「勉強はもうしたくない」という子どもは1965年から増え続け、「もっと勉強したい」という子どもは一貫して減り続けている。それでも、「もっと勉強したい」という子どもが「勉強はもうしたくない」という子どもを上回っていた。しかし、2000年の調査ではこれが逆転した（注4）。

[勉強意欲]



こうした状況は、次のような事態を引き起こしやすい。どの学級にも「勉強はもうしたくない」という子どもはいるものである。それでも「もっと勉強したい」という子どもの割合が上回っていれば、その学級全体には学習意欲が維持される。これが逆転して、「勉強はもうしたくない」という子どもが上回ってしまうと、真剣に、そして、まじめに学習しようとする子どもを排斥する雰囲気が強まり、学級全体の学習意欲は極度に低下する。

(2) 応用的学力、学ぶ意欲、学習習慣

近年、子どもの学力の現状を把握するため、「生徒の学習到達度調査(PASA)OECD

(経済開発協力機構)をはじめ、各種学力調査が盛んに行われるようになった。これらの調査によれば、応用的学力、学ぶ意欲、学習習慣に課題があることが分かる。

「2003年のPASA調査(平均得点)」

[科学的活用力]は2000年調査と同じ2位であったが、[数学的応用力]は1位から6位に、[読解力]は8位から14位に後退した。こうした応用的学力が低下していること、特に、[読解力]の低下が憂慮される。

さらに、順位とともに着目しなければならないことは、子どもの学習に対する意識(日本・OECD平均)である。

「数学で学ぶ内容に興味がある」(32.5% 53.1%)

「学校以外の勉強時間」(6.5時間 8.9時間)

OECD平均と比較して、学習内容への興味・関心・意欲が低く、学習習慣について課題がある。

「2003年国際数学・理科教育動向調査(TIMSS)(IEA=国際教育到達度評価学会)」

国際的に見て上位の成績にあるが、学ぶ意欲や学習習慣については「PASA調査」と同様の傾向が見られる(日本・国際平均)。

「数学・理科の勉強は楽しいと思う」(39% 65%)

「宿題をする」(1.0時間 1.7時間)

「テレビやビデオを見る」(2.7時間 1.9時間)

OECD平均及び国際平均と比較して、学習内容への興味・関心・意欲が低く、学習習慣について課題がある。興味・関心が低く、勉強は楽しくない、ということは、強制されなければ勉強しない、ということである。したがって、宿題をする、などの学校以外の勉強時間も少ない。

(3)[知識・技能]と[関心・意欲・態度]子どもの学力の現状を捉える上で、今日的

で、興味深い調査がある。日本地理学会は、大学生や高校生を対象に、メディアに何度も登場した国の位置について調査した。

「主な国の位置の誤答率(高校生・大学生)」平成17年

アメリカ合衆国(7.2% 3.1%) イラク(45.9% 43.5%) ギリシャ(夏期五輪開催地)(40.6% 23.5%) 朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)(23.9% 9.7%)

こうした実態を、主な国の位置についての知識不足、とだけに断定は出来ない。学習していないので知識がない、何度もメディアに登場しているのに興味・関心を持たない、興味・関心はあるが、調べようとする実践力・行動力がない、調べようと思うが、調べる知識・技能が不足している。このような要因が考えられる。

学力に関する調査では、調査結果を短絡的に[知識不足]に結び付ける傾向があるが、それには注意しなければならない。高校生や大学生が、イラク、ギリシャ、北朝鮮等の位置を正しく答えられない、という結果は、今日の国際情勢を見れば問題である。しかし、それは時事的な問題として、日頃から新聞を読んだりニュースを見たりするとともに、自らそれらの国の位置を調べたりすれば身に付けることができる。こうした[関心・意欲・態度]の不足を問題視する必要がある。

(4)学力の向上と意識の改善の兆し

「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査(平成13年度・平成15年度)」

「有意に上回る」問題数は全体の約43%、

「有意に差がない」問題数は全体の約39%、

「有意に下回る」問題数は全体の約17%

ペーパーテストの結果は、前回の調査との同一問題に関して、いわゆる正答率の経年変化を比較すると全体に向上している。

「勉強は好きだ(小6)」(平成13年度26.9% 平成15年度31.3%)

「学校以外に全く、または、ほとんど勉強しない」(10.8% 9.2%)

児童生徒質問紙調査の結果は、学習意欲や学習習慣等に関して、前回の調査と比較して、わずかに良好な傾向が見られる。

「学校教育に関する意識調査」(平成15年 文部科学省)

「総合的な学習の時間の満足度」に関しては、「好き、どちらかといえば好き」(小5 = 89.1% 中2 = 77.6%)

これを裏付けるエピソードがある。ある中学3年生は、「総合的な学習の時間」での学びを次のように振り返っている。

- 総合は勉強とは違うし、教科の勉強と両立させるのは大変だったが、総合に夢中になってのめり込んでしまった -

ここには明確には自覚されてはいないものの、生徒のジレンマが表れている。それは、学力問題を考えるに当たって看過できない問題である。

夢中になってのめり込んでしまった、というのは、生徒の知的好奇心・探究心が刺激されて、自発的・能動的に学んだのだ。しかし、生徒は、『教科は勉強で、総合は勉強ではない』と考えている。そうした、いわゆる勉強(学習)観は狭い。それは、生徒の責任ではない。長年にわたって構築されてきたものだ。

4 学力問題と学力育成問題

求められる学力、子どもの学力の現状を見てきた。学力育成の方法は、それらと無関係ではない。そこから見えてくる文脈に沿って取組む必要がある。求められる学力と学力育成の方法を乖離させてはならない。

(1) 能動的な学習観を育てる

変化する社会、生涯学習社会の中で、子どもたちに求められている[生きる力]や[確かな学力]を育成するには、広く、能動的な学習観を構築できるようにする必要がある。

大学生の次のようなエピソードがある。

- 大学に入るまでは特に意識はしていなかったが、大学でレポートの課題をするに当たって、いかに自分が今まで、知識を自分の生活の血肉とするのではなく、注入しては吐き出すという勉強の仕方で行ってきたかという現実面に直面することがたくさんあった -

この大学生は、自身に[問題に気付く力]や[問題解決力]等の学力が身に付いていないことに気付き、これまでの勉強方法や自身の勉強(学習)観を悔やんでいる。学力育成の方法は、[確かな学力]を身に付けるとともに、子どもの能動的な学習観を育てることからも創意工夫しなければならない。

(2) 理解、習熟、有用性の往還

学力が向上しつつあるといっても、自分の考えを書くこと、統計資料の読み取り・活用、算数・数学的な理解や表現、観察・実験を通じた科学的な思考など、思考力・判断力・表現力などの学力育成に課題がある(注5)。特に、物語や解説及び図やグラフなどを読み取る[読解力]の育成は喫緊の課題である。

[確かな学力]の育成には、理解させ、習熟させ、さらに有用性を実感させる活動を適切に往還させる必要がある。例えば、計算の知識・技能は、基礎・基本であることに疑いはない。そして、これを確実に身に付けるには、反復による学習が効果的だが、それだけでは十分ではない。計算ができること、学習した計算が適応できる応用問題が解けること、問題場面に直面して、これを解決するための計算が自ら考えられること、は学力の質が異なる。これらを適切に往還してこそ計算力が身に付く。また、計算力の大切さに気付き、自ら理解し、自ら習熟しようとする意欲や態度が育つ。

[読む・書く・計算]等の基礎・基本の指導で、その反復練習に終始するのは、サッカーをするのに、キックやドリブルの練習ばかりで、一向にゲームをさせてくれないの似ている。それでは楽しくないし、自分にとって必

要な基礎・基本に気付くことも出来ない。サッカー好きの子どもでも、やがてサッカー嫌いになる。学力問題も同様で、すなわち「学び離れ」という深刻な状況が生まれる。

(3) 各教科と総合的な学習の時間の関連

学力育成に当たって、次のような事態が見える。学習指導要領の各教科に示されることの厳選された内容は、どの子どもにも確実に身に付けさせたい基礎・基本である。したがって、教科の学力が確実に身に付かなければ、総合的な学習の時間の学習はできない。教科の学力が不十分な状況にあるので、総合的な学習の時間は教科の補充に当てる、と言うものである。

学力論と学力育成論が混乱している。そうした混乱こそが問題であることに気付く必要がある。各教科の学習と総合的な学習の時間の学習を関連させて、「確かな学力」を育成する創意工夫が求められているのである。

(4) 授業の文脈を創る

「確かな学力」の育成には、学習指導要領の基準性を明確にした指導、基礎・基本の確実な定着、個に応じた指導、きめ細かな指導、補充的な学習、発展的な学習、習熟度別学習、観点別学習状況の評価、目標に準拠した評価等々、取組まなければならない課題は多い。しかし、それらは無関係にあるのではない。すべては授業の文脈に位置付く。

例えば、「計算の技能」は、すべての子どもに指導すべき内容であり、身に付けさせたい内容である。一方、計算力が低い、という場合、その実態は、意味や方法の理解不足、練習不足、数の感覚の不足、意欲不足など多様で個別のある。

計算力を高めるには、まず、すべての子どもに対して、よく分かり、よくできるようにする指導を工夫改善する。そして、定着が不

十分な子どもには、その子どもに応じた補充的な学習を行う。また、十分な子どもには、子どもの負担過重や学習指導要領の趣旨を逸脱しないように配慮しながら、発展的な学習を取り入れていく。

それが学習指導要領の基準性を明確にした指導や個に応じた指導の充実の意味である。また、これらの指導を可能にするものが、分析の評価の意味をもつ「観点別学習状況の評価」や、目標の実現状況をとらえる「目標に準拠した評価」である。このように、確かな学力を育成する様々な課題は授業の文脈に位置付く。学力育成には、こうした授業づくりが強く求められている。

学力問題と学力育成問題は密接に関連していなければならない、というのは自明のことである。そこに混乱や乖離が見られるのは、身長を体重計で測るようなもので、学力育成の努力をしても効果が期待できない。学力問題は、学力観・学力の現状・学力育成の方法についての論理や実践に矛盾の無いようにすることが肝要である。

注1：中央教育審議会第一次答申P 8～10
「(3) 今後における教育の在り方の基本的な方向」平成8年7月

注2：「確かな学力の向上のための2002アピール『学びのすすめ』」平成14年1月 文部科学省

注3：中央教育審議会答申「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」平成15年10月

注4：拙著「育て！子どもの学び力」P15
全国学校給食協会 平成15年6月

注5：「平成15年度小中学校教育課程実施状況調査の課題と今後の対応」文部科学省